

蛙模様の深鉢

藤内32号址出土 高さ18.9cm

蛙と女性を
重ね合わせた模様の酒樽

藤内中央墓群出土 高さ51.7cm

黒曜石やチャートなど、薄く鋭い剥片が取れる岩石で作られた矢尻は、文字どおり矢の先につけて鳥や獣の猟に使われました。子どもの頃、偶然にもこの黒く輝く小さな石片を見つけた時の感動を、今も覚えている方も多いのではないでしょうか。

こうして穀物栽培から加工、狩猟、日常生活の道具類に至るまで、人々は「生きる」ための道具を石から作り出してきました。

人々は永遠に止むことのない月の満ち欠けに万物の消滅と再生を重ね合わせ、月こそ死と誕生の本源だと考えていました。そして、月と水・月と蛙との関係に確かな観念をもっていたと考えられます。わけてもひき蛙は、その表皮が月面のデコボコ模様（クレター）に似ていることから、光らない月すなわち月の不死再生を象徴する生き物として崇められました。

確かに月の満ち欠けと潮の満ち引きや月夜と露の関係など、月と水の関係には現実性があります。また、蛙の態様が生まれたての赤ちゃんの肢体に似ていること、妊娠した女性のお腹が大きくなっていく様子が三日月から満月になっていく様に似ていることなどから、水と蛙と女性は月という共通項のもとに結ばれ、様々な文様となつて土器に描き出されています。

石器と並んで縄文時代の生活文化を語るものが土器です。粘土をこねて焼き上げられた土器は、煮炊き用や食器として、また酒醸造の壺などの日用道具として使われた他、死者を葬る際の捧げものとして使われました。

これらの土器は単に道具としてのみ作られたものではなく、当時の人々がその時代の世界観を表し、願いを託すものとして芸術的にも高められている点で、大変興味深いものです。

『沖繩の宮古島に伝わる話』

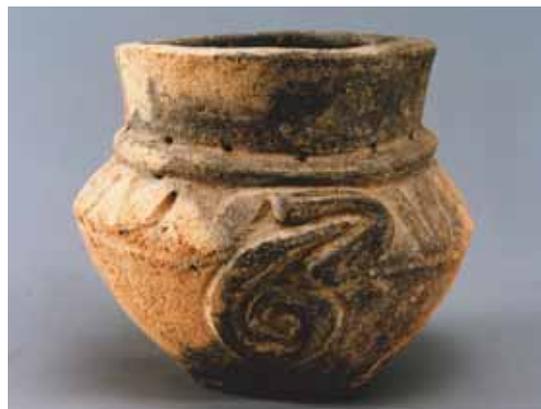
その昔、お月様とお天道様が人間に長命の薬を与えようと、片方に変若水、もう一方に死水の入った桶をアカリヤザガマという者に担がせ、使いとして降ろしました。ところがそこへ一匹の大蛇が現れ、人間に与えるはずの変若水を浴びてしまいました。このときから人は死んでゆかねばならないようになり、蛇は始終脱皮して生まれ変わり、長生きしているということです。

このように蛇も月・水・不死と固く結びついて、この時代の月を中心とする世界観を創り上げていました。

同様の世界観は日本・中国の他、インドス・西アジア・ヨーロッパ・中南アメリカなど広く世界各地の

また、人々は自然界にあるものを月を中心とした宗教的観念の中で崇拜していましたが、蛇もそのひとつです。鱗が光り脱皮して生まれ変わることで、月の運行の軌跡のようにとぐるを巻くことなどの生誕を月と結びつけて考えていました。

ここでひとつの器（写真下）を紹介しましょう。これは酒を醸造した壺で、中の酒は月にある不死の水とみなされていたようです。



蛇文酒壺 藤内遺跡出土 12.3cm

新石器文化の時代に共通のものであることから、人類は、同じ月を見て同じような思想をもつたと考えられます。また、このような世界観の形成は、既に言語体系が確立していたことも裏付けています。

縄文の人々が生きるための道具として自らの手で生み出し、使いこなしてきた石器の機能的な美しさ、生命への尊厳の気持を託した土器の芸術的な美しさ、いずれも私たちに古代の人々の純粋な生への情熱を伝えてくれています。